

一般審査員 劇評B (TKさん【男性、教員、40代】)

◎ 全体を通して

一口に演劇といっても、その形・方向性はさまざまであり、とても興味深く拝見しました。一観客として、いささか浅見を述べさせていただきます。

感じたことを正直に言葉として表現してみました。おそらく、的外れ・見当違いのことも多々あるかと思いますが、素人の偏見片語とお見捨ておきください。

今後とも、多種多様な芝居が同時に存在する演劇祭であることを願いつつ、筆を置きます。

★観た順番・ぴかぴか→Godsound→ACT→れんげ→猿ロマン

● ぴかぴか芝居塾2009『クローバー』

【観劇：21日・13:00の回】

評価40点

- ・ 脚本として、未来を扱う芝居と、それを観る観客（現実）との間にできる壁を打ち破るだけのなにかがないので、観客はストーリーの中に入り込めず、傍観者の域を脱することができなかった。
- ・ 登場人物同士の関係性が伝わらない、わからないので、話に真実味がでない。（二人の子供がなぜそこにいるのか。タケニとナズナの出会い・きっかけなど）
- ・ 場面転換（暗転）が多く、ストーリーとして整理されていない。また、それにスモークが合っていない。
- ・ 出しっぱなしの椅子が木製（自然）であり、空間に合わない。
- ・ 刑事？の二人は、キャラクターを作りすぎた。違和感に最後まで馴染めなかった。
- ・ ラストの窓あけシーンの衝撃性の不足。窓の向こうには何があるの？ さらに、ナズナが車いすから立ち上がり、窓まで歩くシーンは、ナズナの思いを十分に表現する行為であるはずなのに、安易に作りすぎている。ナズナ役の役者にとって、唯一無二の名シーンとしなければいけなかったはずだった。

● Godsound+Studioend『生きてゐる小平次』

【観劇：21日・14:30の回】

評価70点

- ・ 信濃ギャラリーという舞台空間とのバランスがとてもよかった。役者4人の熱演であり、観客を満足させる工夫が十分に伝わった。人形と役者のバランス、関わり合いもよかった。
- ・ 語り役の声、生音とも効果的で観客を引きつけるものであった。
- ・ 人形が演じることで生まれるメリット、造形物に命を与えることで本物以上に生まれる妖艶さ・妖しさがしっかり出ていた。ただ、メリットはこれだけか？
- ・ 語りの巧みさに比べると、人形の動きに不足を感じた。語りとの同調性であったり、特に人形の顔の向きであったり、手に頼りすぎていたりという部分だが。
- ・ ストーリーとして観た場合、結末が弱い。観客としては、ごまかされた感じが残る。

- ・ 汚れた、底辺を生きる男にしては、中心となる右手がとてもきれいすぎる。何か工夫ができなかったか。
- ・ 舞台中央に置かれていた箱は、入れ物としての機能しかなく、それだけのためなら、舞台上に置く必要のないもの。装置として生かせなかったのか。色も興ざめ。せめて西洋アンティークか何か・・・
- ・ 役者が棒を持って踊るシーンは、何？
- ・ ラストのあいさつにつながる歌の部分は、興ざめ、工夫がほしい。ストーリーの結末ともつながるのだが。

● 劇団 ACT 『人間失格』

【観劇：21日・16:30の回】

評価50点

- ・ 太宰の「人間失格」と新撰組・沖田総司を結びつけているのは、「使えない男」という1点だけであり、ほぼすべてが新撰組のストーリーであった。これで太宰を出す必要があったのか。たとえば、オープニングで太宰に触れているのだから、エンディングでもう一度太宰に戻り、額縁的に使ったらどうであったか？
- ・ 映像的シーン割で構成されている（ねらい？）のだが、ブツブツと切れる音響とともに今一步馴染めなかった。
- ・ 新撰組が、ただの不良のごろつき集団にしか見えない。正非は別としても、あるひとつの目的・理想を持ち得た集団としての気高さがなかった。まして、沖田に至っては、「そうちゃん」と呼ばれる、弱々しい、惨めな引きこもり青年で、それがついに切れて無差別殺人をしてしまうような男にしか見えなかった。それが、この芝居のねらいなのか？とも思い巡らすのだが・・・
- ・ 総司とお孝の関係性が描ききれていないので、後半へいくと二人の関係がうそっぽい。
- ・ 総司は、なぜ前半部分刀を持っていないのか。また、刀を持つ役者の持ち方がバラバラであった。
- ・ 台詞に強弱はなく、変化に乏しい。正面向き台詞を多用していたが、もう一工夫欲しかった。
- ・ 洋服を着て江戸時代を語る、超次元芝居設定はひとつの手法だとは思いますが、男役が刀を持つように、女役も時代を表す何かを身につけさせた方がよかった。女役のあの衣装では表現できていない。

● れんげでごはん『珈琲とか紅茶とか』

【観劇：21日・18:00の回】

評価80点

- ・ 力の抜けた演技。登場人物が自然な台詞回しで統一されていて、観客に何かを無理強いしない芝居の雰囲気心地よい。
- ・ 役者全員に、役者がそこに存在する当然の意味を持ち得ている演技が感じられた。特に編集者・小川君役は秀逸であった。演劇祭の最優秀演技賞をあげたい気持ちだ。
- ・ ストーリーとしての結論をあえて与えないこと、提示しないことが、かえって成功につながっている。だとしたら、ラストの大学館漫画大賞の結果は、出さない方がよかった。観客に想像させてはどうか。
- ・ この芝居では、主人公が主人公の作中キャラクターと会話するシーンが、芝居の変化球として存在しているのだが、観客としては、もう少し見かけ上の変化があってもよかった。やや地味で、不足を感じる。

● 劇団ザ?猿ロマン『スリーウィッシーズ』

【観劇：21日・19:30の回】

評価60点

- ・ 60分間、病院という設定以外なにも与えない、観客に謎と緊張と渴きを強いる芝居であった。それがねらいと考えれば、成功しているのだろうが、正直疲れた。
- ・ 「世界が崩壊する」「自分が世界を救う唯一の人間」と語るまでに20分以上を要したのは、もどかしい限り。
- ・ 観客は、診療室の奥はどうなっているのか、とても知りたいと思う。ラストまで引っ張り続けたのはよいとしても、たとえば、診療室から出てきた人の体に葉っぱか種か何か付いているとか、服がよごれているとかいう、観客が想像できる手法をとってくれれば、親切だった。
- ・ 男女の患者の身の上が全く描かれていないのも、観客が芝居に入り込めない要因か。
- ・ 看護婦役の役者が、唯一人間的で、観客にとっては救いであったと思う。
- ・ すべての発端を握る医院長の登場が遅い。60分の芝居であれば、上演10分以内には、メインが何らかの形で登場しなければ、それは今回で言えば、ラストのジャングル風景と同じ価値しか持たない。
- ・ SEのパトカー音は、意味を持たせて使っている割には・・・？